

# 46億年の恋

2006(平成18)年9月9日鑑賞(ホクテンザ2)



監督＝三池崇史／原作＝正木亜都（梶原一騎、真樹日佐夫）『少年A えれじい』／出演＝松田龍平／安藤政信／窪塚俊介／渋川清彦／金森雅／遠藤憲一／石橋蓮司／石橋凌（エスピーオー配給／2006年日本映画／84分）

……三池崇史監督が描く、松田龍平と安藤政信という日本映画界を代表する美しき少年と青年によるラブストーリーとは……？ そもそも、それだけで私には？？？ 極端にセリフが少なく、抽象的な映像からエロティックで哀しい男たちの苦悩を実感せよ！ ということらしいが、私の感性では、そりゃとても無理……？ 観客に媚びる映画は嫌いだが、監督が好き勝手にこね回し、「さあ、俺のイメージを理解しろ」と押しつけられるのはもっとイヤ……。久しぶりに時間の無駄遣いをしてしまったという実感が……。

## 少年と青年のラブストーリー……？？？

この映画は、三池崇史監督が描く、美しい少年有吉淳（松田龍平）と美しい青年香月史郎（安藤政信）を主人公にした世にも美しく官能的なラブストーリーということだが、そもそも、そりゃ一体ナニ……？？？ 女性的な美しさを持つ有吉と、凶暴でたくましく男性的な美しさを持つ香月が、なぜ互いに惹かれあい、なぜある事件に巻き込まれていったのか？ そして、香月の死亡は、有吉の言うように有吉が手をかけたことによるものか？

そんなストーリーらしきものはあるものの、スクリーン上に描かれるのは徹底した抽象画……？

線だけが引かれた刑務所の独房は、あのニコール・キッドマンの『ドッグヴィル』（03年）を彷彿させるものだが、刑務所の壁の穴から見えるピラミッドやロケットそして美しい蝶は、一体何を暗示するのだろうか……？

## ストーリーらしきものは……？

ゲイバーで働いていた有吉が刑務所に入って来たのは、中年の男客から性的暴行を受けたことに逆上して、この男を殺したため。血で衣服を真っ赤に染めた有吉は、男が絶命した後も何度も何度も死体を損傷させていたが、それは何のため……？

他方、劣悪な環境で育った香月は幼い頃からさまざまな罪を犯していた。その端正な顔立ちに似合わず、香月は自分の気に入らない者は、誰かれとなく殴り倒していくほど凶暴な男だった。そんな2人は偶然同じ日に刑務所に収容されてきたが、この全く正反対のタイプの2人の心が何らかの形で通じ合っていることは、周りの収監者たちの目にも明らか。しかしある日、香月の上に馬乗りになって、その首を絞めている有吉の姿を看守が発見。有吉は「僕がやりました」と叫んだが、さてその真相は……？

## 事件解明の手法は……？

以上がこの映画のストーリーらしきものだが、その解説は第1に、この事件の捜査にあたる警部補（遠藤憲一）と警部（石橋蓮司）との会話、そして後半から顔を出す刑務所長（石橋凌）の驚くべき証言によってなされていく。それはまだいいのだが、これはナニと思うのは、スクリーン上にさかんに質問の字幕がながれていくこと。一方で、極端にセリフを減らして抽象的な映像を目指しているのに、他方でこんなに頻繁にスクリーン上に文字を流し、まるでニュース番組のような解説を加えていくのは、興ざめもはなはだしいのでは……？ こりゃ一体なぜ……？

## 金森穰のダンスは……？

遠藤憲一による長々とした（？）詩の朗読があったかと思うと、1人の少年が登場し、「お前はどんな男になる……？」という問いかけが……。そして1人の踊り狂う勇者（金森穰）が登場し、何とも怪しげで激しいダンスを披露するが、そこにも1羽の蝶が……。

そんな状態で映画が始まっていくが、さあこれからどうなっていくのかサッパリわからないというのが正直なところ。その後、少しずつストーリーらしきものが見えてくるが、この間ほとんどセリフはなしという状態だから、観ていて疲れることおびたしい……？

パンフレットを読むと、演出振付家・ダンサーである金森氏はさまざまな賞を受賞している有名なダンサーで、「その実験的な試み、斬新な演出は高く評価される」とのことだが、映画出演は本作が初とのこと。たしかに、そのダンスにはすごい迫力があつたが、意味がわからなければほとんど無価値……？

### 刑務所内って何でもあり……？

有吉と香月のセリフが極端に少ない中でも、香月の死亡についての真相究明は少しずつ進んでいく。その鍵を握る人物は、物資の調達係をしている模範囚の土屋（渋川清彦）と、有吉と同じように囚人仲間の間では、オンナ役をしている（？）美しい男、雪村（窪塚俊介）の2人。香月の腕力、武道の冴えは超人的で、囚人たちは誰1人これにかなわなかったから、そう簡単に香月の首がヒモでしめられることはないはず……？ だとすると……？

そんなこんなの推理と捜査が進められていくが、ひょっとして刑務所内って、何でもあり……？

### こんな映画は大の苦手……

こんな抽象画のような映画では、セリフは極端に省かれており、2人の主人公の姿を抽象的な映像でつなぎ合わせていく中で、観客がいかに感じいかにイメージしていくかが勝負だが、私はこんな映画は大の苦手……。どんなストーリーが観客受けするのかを事前にリサーチして観客の望むストーリーづくりをする映画や人気コミックのキャラをそのままってくる映画も私は嫌いだが、意図するとしなにかかわらず、この映画のように監督が勝手に物事をひねくりまわしたうえ、そのイメージを理解できるかどうかと観客に押しつけてくる映画（？）はもっと嫌い……。

三池崇史監督の『IZO』（04年）にも失望した（『シネマルーム6』222頁参照）

が、今回はもっと失望。久しぶりに、映画を観て無駄な時間を遣ってしまったなという実感が……。

## 『キネマ旬報』の評価は……？

私はいつも『キネマ旬報』の評論家4氏による「REVIEW 2006 Part 2」を楽しみに読んでいるが、9月上旬号には今野雄二氏、萩尾瞳氏、塩田時敏氏、三笠加奈子氏による『46億年の恋』の評価がある。

まず、4点（必見！）をつけた塩田時敏氏は、「前衛的、実験的演出が見事に確立」「ここには豊かな映画マインドがみなぎっており、映像の官能性が際立っているのだ」と絶賛！

次に「ひりひりと切ないラブ・ストーリー」と評する萩尾瞳氏も、「最後にロケットが飛んでくれてよかった」と評する三笠加奈子氏も共に3点（一見の価値あり）だが、全体の文章を読めば、どちらかと言うと萩尾氏は4点に近い3点、そして三笠氏は2点に近い3点という感じ……。

最後に最も厳しい2点（悪くはないけど）をつけた今野氏は、「全体的に観念的で肉感的官能性は希薄だった」と評している。

『46億年の恋』のような観念的で抽象的な映画の評価は難しいのだろうが、刑務所のセットデザインが『ドッグヴィル』よりも上とみるか下とみるか、またこの映画の官能性が際立っているとみるか、それとも肉感的官能性は希薄だったとみるかなど、4氏の評価が正反対になっている点が面白い。そして私の評価は前述のとおり。さて、あなたの評価は……？

2006（平成18）年9月11日記